

《Article》

A Study on Tsunesaburo Makiguchi's Work at the Ministry of Education

—His Struggles Toward Compiling a National Textbook—

Kazuyuki Uefuji

In 1908, Tsunesaburo Makiguchi, the first president of the Soka Gakkai, abandoned a business venture he initiated to provide correspondence education for secondary school girls. Then, after teaching at an elementary school in Tokyo, he entered the Ministry of Education in 1910. His job description was to research textbook materials, but he may have been involved in work to compile a textbook for geography. The year after entering the ministry, Makiguchi was sent to conduct a rural survey on Doshimura, a remote mountain village in Yamanashi prefecture for 10 days. Furthermore, three months after that, he was sent to investigate one of the remotest mountain villages in Kyushu for 20 days at the request of the Ministry of Agriculture and Commerce. He submitted a report regarding this investigation. Makiguchi may have received such difficult assignments from the ministry as retaliation for an article he wrote in a magazine just after entering the ministry, which was severely critical of the content of geography textbooks compiled by the Ministry of Education. It can be inferred that because administrators within the ministry took offense at the article that Makiguchi was transferred from central ministry administration to the regional Tokyo office.

《論文》

文部省時代の牧口常三郎に関する一考察

— 国定教科書編纂事業における苦闘の軌跡 —

上 藤 和 之

1、初めに

1908年（明治41年）8月、通信制高等女学校「大日本高等女学会」の主幹を辞した¹⁾牧口は、その2年後の1910年（明治43年）に文部省に入り、地理科教科書の編纂に従事した²⁾とされている。

一方、牧口はその翌年5月、推定約10日間をかけて柳田国男とともに山梨県南都留郡道志村一帯を踏査³⁾して報告書を作成、さらに同年8月には推定20日間をかけて農商務省山林局の囑託を受け大分県津江、熊本県小国一帯を調査して報告書を提出⁴⁾している。

文部省で教科書の編纂に携わる牧口が、農商務省囑託として農山村を調査することになる背景は、これまでの研究で明らかになっていない。

そこで、牧口が文部省で仕事を行っていた前後の時期を詳しく調査し、時期を区分して整理する。そして、地理科教科書の編纂事業への関わりとその苦闘の軌跡を当時の資料から明らかにし、その後の新しい理想の教育へと進む牧口の雌伏の時代として位置づけていきたい。

2、通信教育事業の行き詰まりと柳田国男との出会い（1909年～1910年）

1908年（明治41年）、華族の人々を招へいするなど拡大した通信制高等女学校事業は最後に行き詰まり、牧口は通信教育、慈善教育活動の事業を離れ1909年（明治42年2月）から、再び教育の現場に立ち、東京市富士見尋常小学校の首席

訓導に就任⁵⁾した。

就任3か月後の5月2日、馬場孤蝶（本名・勝弥、英文学者・翻訳家）⁶⁾の紹介で法制局参事官として各地の農山村で郷土研究を進めていた柳田国男を訪ねている⁷⁾。

柳田はちょうどこのころ郷土研究会を立ち上げ⁸⁾小田内通敏⁹⁾などとともに関西各地を旅行してその見聞の交換をし合っていた。有名な「郷土会」の先駆的存在である。

また、柳田の代表的な著作『遠野物語』出版はこの翌年のことで、柳田はこの時期、官界での栄達から距離を置き農政学に本格的に取り組もうとしていた¹⁰⁾。ために暇さえあれば農山村を旅して歩き¹¹⁾熱心に研究していた。

牧口はこの郷土研究会のことを聞いて柳田を訪ね、種々の質問、懇談をしたのではないと思われる。

牧口はこの2年後に『人生地理学』と並ぶ大著『教授の統合中心としての郷土科研究』¹²⁾を発売している（以後、『郷土科研究』と略称）。これは諸教科の根底に郷土科を置くべきであるとする画期的な郷土研究の大著である。

子供たちが自分の郷土を教材として直観的にそれを深く観察することにより、おのずから日本全国が、いな世界がみえてくるという牧口の世界観を教育現場に実現しようとするものでもあった。

だが、その「序言」¹³⁾を見るとすでにこのころ著作は完成段階に入っていたと思われるが、その執筆にあたり柳田の郷土研究会に眼を向けた可能性があるだろう。牧口はのちにこの『郷土科研究』（改訂10版）のなかで柳田を評して「郷土研究の元祖であり、大先達であるのみならず、今後共恐らくは唯一の指導者といって過言であるまい」¹⁴⁾と書いている。得るところが多かったに違いない。

柳田の知己を得、地理研究をいっそう深めていた牧口が、小学校の現場で使用される国定の地理教科書の編纂に携わることになる。次に、この編纂事業に牧口が携わることになる経緯とその事業の変遷を明らかにし、その中で見えてくる葛藤を明らかにしたい。

3、文部省の嘱託時代（1910年5月～8月）

牧口は富士見尋常小学校の首席訓導になってわずか一年後の1910年（明治43年）4月にこの小学校を退職し、5月からは文部省に入った¹⁵⁾。当初は教科用図書調査嘱託の立場¹⁶⁾だった。当時の文部省組織表¹⁷⁾をみると、大臣、次官などの勅任官、秘書官、書記官、文部編輯、技師などの奏任官（以上が上級官僚）と属、技手の判任官（下級官僚）がいた。その下に雇員（事務員）などがいたが嘱託は臨時雇いで正式な文部省職員ではなかった¹⁸⁾。

これについて『評伝 牧口常三郎～創価教育の源流 第一部』（以後『評伝 牧口常三郎』と呼ぶ）では、「文部省図書課で牧口が担当したのは小学校の地理教科書の編纂である」¹⁹⁾としている。

その史料として雑誌『教育界』第9巻第7号²⁰⁾をあげその「牧口常三郎氏、文部省編輯局員拜命。地理編輯に従事」という記事により書いたとしている。

ここで注意しなければならないのは、この時に文部省に編輯局はなかった²¹⁾こと。また、この『教育界』記事に「地理教科書の編輯」とは一切書かれてないことである。地理編輯と地理教科書の編輯は必ずしも一致しないのでこの雑誌記事は裏付けにはならない。『東京府市自治大鑑』（後巻）でも牧口のことを「文部省の嘱託として地理教材の編纂に従事すること三星霜」²²⁾と書かれていて、あくまで牧口の仕事は地理教材編纂であって地理教科書の編纂ではないことが指摘できる。

また、牧口が同年6月1日発行の『内外教育評論』²³⁾に寄稿した論文の肩書は「文部編輯」となっており、『帝都紳士淑女列伝』²⁴⁾に紹介された牧口の略歴には「明治43年5月2日 教科用図書調査嘱託（文部省）」とある。「地理編輯」「地理教材の編纂」「文部編輯」「教科用図書調査」と様々な異なる肩書で表わされる牧口の実際の仕事はどのようなものだったかを次に検証したい。

教科書疑獄²⁵⁾を受けて文部省は1903年（明治36年）4月に小学校令を改正して国定教科書制度を確立、一挙に国定教科書編纂を開始、専任編輯官4人を置い

て国定教科書の編輯を行わせ、翌1904年（明治37年）の4月からそれが全国の小学校で授業に使われた²⁶⁾。

さらに1908年（明治41年）には教科用図書調査委員会を設置して教科用図書の審査、編輯にあたらせた。改訂版編輯である。これが全国の小学校で使われ始めたのは牧口が文部省に入ったこの1910年（明治43年）だった²⁷⁾。

実際、この改訂版教科書を使って授業する教員のため、『地理教授要領 改訂国定教科書 尋常科五年』²⁸⁾、『尋常科 改訂国定教科書 新教授細目』²⁹⁾といった改訂国定教科書の“教師用虎の巻”が全学年、全教科向けにこのころ続々と発行されている。

さらに1910年改訂の新国定教科書のほぼすべてにわたり、すでにその教育指南書が各学校の教員用に編集発行されていただけでなく、各地で教員対象の講習³⁰⁾も行われた。だから牧口が文部省の嘱託になった時には少なくとも1910年改訂の地理教科書編輯の直接の仕事は終了していたことがわかる。

しかし、『評伝 牧口常三郎』（185頁）では、牧口は地理教科書の編纂に実際に当たったとして、「伝記 牧口先生の御一生」に書かれた以下の牧口の家族の証言を引いている。

「せっかく骨を折って生きた地理を書いても文部省では大事な肉はけずりとして、骨ばかりにしてしまう。そしてすこぶる多しとかやや多しとか、そんな語句の上の表現にとらわれて、形式をととのえる事にだけ頭をつかっている」³¹⁾と家族に語ったという。

これは、牧口没後にその一生を親族から聞き出して取材した話をまとめたものであり、果してこれが1910年（明治43年）に文部省に入った時の話かどうか、いつ語られたかについても不明である。

しかし、実際に教科書を執筆した際の非常に具体的な感情があらわされているのは確かであり、ひとつの可能性としては、大正9年の国定教科書改訂に携わった経験を指しているとも考えられるが、すでにこの時、牧口はいなかったので可能性は小さい。それよりもこれは文部省時代の経験に対するものではなく、これより10数年前にさかのぼる北海道師範学校在職の時代に地理教科書を

編纂した時の経験ではないかというものである。

1898年（明治31年）3月9日、北海道教育会の評議員会が開催され、北海道として高等小学校教育用の北海道地理教科書を編纂することが決定³²⁾され、その草案を懸賞募集したが、その審査委員の一人に牧口が選ばれている³³⁾。

選ばれた草案を教科書にするため、さらにその草案を訂正・編纂する委員会がつくられ牧口たちがそれについて³⁴⁾。

翌1899年（明治32年）、牧口たちが修正加筆した草案が文部省に検定出願され合格。1900年（明治33年）9月に北海道教育会編纂の『北海道地理』として発売され、1903年に国定教科書が文部省から発行されて使用されなくなるまで道内の小学校で使用された³⁵⁾。

この時、間違いなくこの教科書は文部省検定を受けているので、まさに文部省が大事な肉を削り取り、形式的な表現だけに重点をおいた『北海道地理』教科書だった可能性も否定できない。

したがって、没後に親族から「大白蓮華」編集部に伝えられたこの言葉だけでは、文部省で牧口が地理教科書を編纂した時のものなのか、北海道時代のことかは明確にできず、さらなる検証が必要となるであろう。

次に『評伝 牧口常三郎』があげている『創価教育学体系』第4巻の次の証言についても検証したい。

「従来の国定教科書は三すくみの状態で責任転嫁がなされ、そのお蔭で事実の間違わぬものは出来るが、善いものは出来ない状態にあることは、余が昔文部属として小学校地理教科書の編纂に携わった経験から斯く云うのである」³⁶⁾と。

ここで確かに牧口が「文部省の文部属として地理教科書の編纂に携わった」と書いている。だが当時は先にも書いたようにすでに改訂版国定教科書が印刷発行され生徒の手に渡ったばかりの時期である。

教科用図書調査に携わる自身の経験とともに、出版されたばかりの改訂版国

定教科書を板ばさみの状態で編纂した上司や同僚からその仕事内容や苦心した話を聞いたことに対する率直な感想を書いた可能性もあるだろう。

こうした時期に引き続いて地理の教科用図書調査（教科書、副読本、参考教材などにかかわる調査、審査）の仕事を文部編輯嘱託として、後に文部属として手掛けた可能性が大きいといえる。それは大きく言えば地理科教科書の編輯に携わったことにもなるのである³⁷⁾。

4、文部属としての東京府出向時代（1910年8月～1913年）

牧口が正式に文部省官吏「文部属」に任用されたのは、その臨時職の嘱託になってわずか3か月後のことである。

先の畠中惣治郎『帝都紳士淑女列伝』によれば

「明治43年8月6日 任文部属 東京府へ出向を命ず 文部省文部大臣官房図書課勤務を命ず」

とある。つまり、文部大臣官房図書課の仕事をするため東京府に出向が命じられた。立場は下級官僚・判任官の文部属、と解釈できる。

ところが『評伝 牧口常三郎』ではこの「東京府へ出向を命ず」を削除して単に「明治43年8月6日 任文部属 文部省文部大臣官房図書課勤務を命ず」（184頁）と記し、その補注で『帝都紳士淑女列伝』には、この後に『東京府へ出向を命ず』と記されているが、これは1913年4月の東盛小学校への転任のことではなかろうか（196頁）としている。

しかし、「この後に」ではなくその間に東京府への出向の記述があるのである。

牧口は確かにこの3年後の1913年（大正2年）に東盛小学校校長に転任³⁸⁾している。

『帝都紳士淑女列伝』では、この「任文部属 東京府出向 文部省文部大臣官房図書課勤務を命ず」に続いて「大正3年4月4日 東京市東盛尋常小学校

訓導 下谷第一夜学校校長兼任」(下線筆者：実際は大正2年の誤り)と、東盛小学校校長就任の記載があるのである。

この東盛小学校転任が文部属のままの東京府出向(在籍出向)であった場合、当然1913年(大正2年)の文部省職員名簿³⁹⁾に牧口が文部属として残っているはずだが、そのような記載は確認できなかった。

つまり牧口は1910年から13年にかけて文部属になると同時に東京府に在籍出向し、その後1913年には文部省を辞して東盛小学校へ赴任したと考えられよう。

1910年時、大臣官房図書課には教育関係書籍の審査にあたる6人の図書審査官6人や、文部編修(教科書編輯)の担当官に4人、その下に4人の文部属がいた⁴⁰⁾。

ただし、1910年(明治43年)の5月時点で牧口は嘱託だったので名簿には記載されてないが1911年(明治44年)『明治四十四年 職員録 甲』に初めて牧口の名前が属として記載されている。この時東京府に出向していたとしても籍は本省に残るので記載は当然だろう。

ところがこの1911年(明治44年)5月10日に図書課は廃止され、同日、勅令第144号により大臣官房から切り離されて図書局が誕生した。

局長以下、図書審査官3人、文部編修(担当官)4人、その下に牧口など属が5人いた⁴¹⁾。在籍出向であれば東京府出向のまま牧口は図書局にいたことになる。

また、牧口の上司、文部編修の上級官僚・喜田貞吉は、『還暦記念 六十年の回顧』のなかで、「当時は国定教科書の編纂も片付いて暇ができ、1905年(明治38年)以降は東大の講師や、京大の講師をするため毎週、当該大学の現地に赴いて講義し、さらに好きな趣味の研究にも手を出し、学位論文をとりまとめ、文部省の仕事は出張先まで携帯して…」(趣意)と書いている。さらに1910年(明治43年)になって「面倒だった国定教科書の教師用も完成し、自身の著

書『国史の教育』を発刊した」⁴²⁾としている。

改訂版の国定教科書編輯も教師用虎の巻も完成し次の改訂に向けた教科書編輯の仕事も少なくとも多忙ではなかったであろうことがわかる。

教科用図書編輯の担当官の状況から、その部下で文部属の牧口達の仕事も教科書や教材に関する調査やその報告書などが中心であったと推察できる。

さらにそれを裏付けるように、文部属になって2か月後の10月から東京高等師範学校で開催された文部省主催の第3回師範学校中学校高等女学校教員講習会（歴史及び地理科）を、牧口は約40人の中等学校の歴史地理教授担当の教員とともに5週間にわたり受講⁴³⁾している。

もともと25歳で文部省の中等学校教員検定試験に合格⁴⁴⁾し、北海道師範学校の地理教諭をしていた牧口が今更受けなければならない講習会ではない。ところが足掛け3か月（約5週間）にわたるこの講習会をほかの教員共々受講している。

やはり東京府に出向して本省から離れ、小学校の地理科のみならず、師範学校、中学校、高等女学校での地理科教育にも関心を広げていたことを物語る事実といえよう⁴⁵⁾。

さらに、図書館は設置から2年後の1913年に廃止される。

この図書館廃止について『評伝 牧口常三郎』では「(牧口が) 地理教科書の編纂に従事することは、地理の教授法を改良する機会になるかもしれない。しかし、現実はそのようではなかったのである」(185頁)として「牧口の上司・喜田定吉は、小学校の歴史教科書の記述をめぐって新聞や国会で非難され、1911年3月下旬頃に休職になった。また牧口が所属していた図書課は11年5月に図書館に改組されたが、2年後の13年6月に廃止され」(同書補注197頁)と、あたかもこの喜田が追放された事件によって牧口がいた図書課も図書館も廃止に追い込まれて、牧口は地理教授法の改良どころではなくなったかのように書いている。

確かに牧口の上司で文部編修担当官の喜田が教師用教科書に書いた南北朝問題（南北朝時代の北朝と南朝のどちらが正統の天皇かをめぐる論争）が「大逆事件」で

逮捕された幸徳秋水の発言をきっかけに火を噴き、新聞や国会で取り上げられて大問題になり、その火の粉を浴びて喜田が文部省を追われたのは事実である⁴⁶⁾。

だが、喜田が図書局長ならばいざ知らず、文部編修担当官のひとりではなかったため、それとこの本省図書局廃止の関連は大きくないであろう。あくまでも、1910年（明治43年）国定教科書編輯や改訂、教師用教科書編輯、それにとりなう調査など一連の仕事が終わったあとの機構改革の一環である可能性が高いといえよう。

その文部省から、前述したように牧口は嘱託就任からわずか3か月後に、文部大臣官房図書課の仕事をするため東京府に出向したと考えられる。当時、東京府庁舎は1894年に新築され麹町区有楽町にあった。そこが新しい牧口の職場になったのではないかと考えられる。

教科用図書調査の嘱託として雇用しながら、正規の文部省官吏として東京府に出向した牧口の仕事は何だったのだろうか。

ひとつ考えられるのは東京の各学校で使用された国定教科書に対する意見報告の聴取である。1904年（明治37年）、国定教科書が使用されて以来、意見聴取がなされてそれを文部省がまとめて教科書編輯の参考にしていた⁴⁷⁾ので、東京府にあった多数の小学校、中学校、女学校、師範学校などでもその調査をしていた。改訂版国定教科書についてもその仕事を担った可能性が高い。

文部省から東京府への在籍出向という事態に至る背景を想定させる史料はなにひとつない。しかしひとつの可能性として考えられるのは、教科用図書調査の嘱託としてその仕事に取り組み始めてからわずか1か月の1910年6月1日発行の雑誌『内外教育評論』第4巻第6号に記載された牧口の仕事である。そこに牧口の文部省批判もとれる「日本地理教授上の主眼点」（談話筆記）という記事が掲載されている。

そのなかで牧口は日本地理の教材の平凡さを指摘し、「至って平々凡々、従って之が教授も至って平穩無事、従って之が学習に於いても至って淡泊無

味、云わば書く人も、読む人も、教える人も、習う人もただ何のことはない」と批判し、「如此して出来上がって居る現在の小中学の地理教科書乃至参考書が、果して理想通りに達しているや否やと云うとは、これを一概に断言することは出来ないが（中略）教授に於いても、読者に於いても、不満足に思うと云う点にはほとんど異論のないことであろうと思う」⁴⁸⁾とていねいな表現ながらきびしく批判を展開している。そして教材の取捨選択の標準として日本の国民生活に著しく関係のないものは、思い切って省くべきである、と痛烈な批判をこめて自らの思いを主張している。

実はこの雑誌『内外教育評論』のこの号は文部省や国定教科書改訂版の総批判特集になっていて、この雑誌主筆が社説として「再び学制改革案を評す」と文部省から出された学制改革案（高等中学校の3年制を2年半にするなどの改革案）を徹頭徹尾不満足と攻撃し⁴⁹⁾、解説記事ではこの改革案に帝国大学はおろか文部省内からも不満や意見が沸騰していると暴露した。

さらに新教科書に対する批判を全国の現場からの声として特集。加えて文部省の怠慢で全国の小中学校にまだ教科書500万冊が行き渡らず生徒が途方に暮れているなど、文部省を総攻撃する内容が過半を占めている。

そこに囑託ながら現役の文部編修の立場で牧口が改訂されたばかりの地理教科書を批判する内容の論文を談話筆記の形で掲載した。談話筆記だから本音が出たのであろうが牧口は終生、権威も権力も恐れず行動しただけに改訂新地理教科書について思うところを率直に批判したのであろう。

その結果、間違いなくこれは身内に対する批判であるとして、しかも囑託の人間が入省したばかりで本省の仕事を批判した行動として文部省内の怒りを持った可能性も考えられる。

雑誌掲載の2か月後に牧口は囑託から文部属となったものの東京府に出向となった背景には、こうした複雑な背景があったことは確かである。

5、郷土会の参加と農村調査

先述した文部省主催の教員講習会が終わった翌日の1910年（明治43年）12月4日に新渡戸稲造宅で郷土会の初会合が開かれた。それがこの会の歴史的な結成とされ⁵⁰⁾柳田の郷土研究会の結成にかかわったと思われる牧口がまもなくこの郷土会の一員になったのは当然だと思われる。

その後1919年（大正8年）ころまで計60回以上、郷土会は開催された⁵¹⁾とされる。牧口も後年「余もまた終始席末を汚した」⁵²⁾と書くほどほとんどの例会に参加したとみられる。それも東京府に出向していればこそできたのではないだろうか。

牧口が所属する文部省大臣官房図書課が図書局に改組されたのはその半年後、翌年5月10日だった。まさにその日、牧口は柳田国男に誘われて農山村調査のため山梨県南都留郡道志村の入り口・道坂峠を目指して旅していた⁵³⁾。

牧口が東京府に出向の立場であったために、農山村調査に行くことができたといえるだろう。推定10日間前後の調査行だった。

さらに、牧口が出向しているからこそできたと考えられるのが、道志村調査の3か月後（明治44年8月）に行った農商務省山林局の嘱託として取り組んだ九州農山村調査だろう。福岡県、大分県、熊本県の3県が相隣接する九州のまさに背骨といわれる中心部の山奥の農山村調査である。

今に残る『前津江村事務報告綴』⁵⁴⁾や『北小国村役場 日誌』⁵⁵⁾などの現地の記録によれば、牧口は同年8月20日に大分県（豊後）の前津江村の役場に到着、調査を開始した。

柳田自身がこう書いている。「農商務省山林局の嘱託を受けて、君（牧口のこと：筆者注）は九州の山村を踏査した。筑後川の上流に位する最も奥深い豊後の津江村（前・中・下の三村）と、肥後の小国村（南・北の二村）の生活状態を調査するのが主眼である。

一方の憂慮すべき状態と他方の模範とすべき状態とが相隣り合つて居るのを比較した報告書を農商務大臣に提出して、当局者及び同好研究者の参考に供し

た」⁵⁶⁾と。

明らかにこの農商務省嘱託の調査に元農商務省の官僚だった柳田が関わっていたことがみえてくる。郷土会には柳田の後輩の農商務省官僚二人もいて九州の農村調査もしていた⁵⁷⁾。牧口にその仕事の一部を嘱託として手伝ってもらった可能性がある。この調査が終わった8月29日付で牧口が九州の現地から終了を報告する絵はがき⁵⁸⁾をわざわざ柳田に出しているのもそのあらわれだろう。

こうした事実をもとに当時の時刻表⁵⁹⁾などから推定すると少なくとも往復10日、全行程20日間と推定される長期調査行だったろう。これは時間的に相当な余裕がなければ無理だったはずである。文部属の牧口が無関係な農商務省の仕事を経験することができたのは、やはり東京府出向という特別な条件下にあったからこそできたのではないだろうか。

さらに言えばその出向の立場だからこそ、この道志村、九州山村調査の翌年、1912年（明治45年）6月1日には「郷土会」例会として開催された神奈川県・原町田方面の小旅行に参加し（参加者名簿はない）、またその翌年1913年（大正2年）3月29日から2日間、同じく郷土会の例会として開催された武蔵野－埼玉・新座、北多摩方面の学術調査（参加者名簿はない）⁶⁰⁾に参加できたであろうと考えられる。

著述に没頭できたのもこの環境があったからだろう。1912年（大正元年）9月25日には『人生地理学』訂正増補第10版を発刊し、2か月後の11月23日には牧口著作の三大部の一つともいえる先述の『教授の統合中心としての郷土科研究』を発刊した。

この初版は高い評価を受け発刊わずか2か月で売り切れ、1913年（大正2年）1月22日には再版が発行され、その年末には第3版を発行した。

なお、この『郷土科研究』は1923年（大正12年）5月に改訂第9版が発行⁶¹⁾されるまでほぼ毎年のように刊行され、郷土教育の重要な参考書として広く読まれたことがうかがえる。

終わりに

以上の考察から牧口が文部省の囑託から属官になる際、本省を批判したことが東京府への出向に何らかの影響を与えた可能性が考えられる。だが、牧口はそれをものともせず、その立場を逆に最大限に活かして調査研究や著述活動に取り組んだといえるだろう。

そして、この1913年（大正2年）6月13日には牧口が文部属として所属する文部省図書局が勅令第173号等により文部省普通学務局に吸収⁶²⁾された。

それに先立つこの年4月4日に牧口は文部省を退職し、教育の現場に復帰⁶³⁾した。牧口が出向していたと思われる東京府庁舎には市役所が同居していて、そこが管理・運営する各小学校校長の仕事はすぐそこにあった。

これについて、牧口に直接取材して書かれたと思われる南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」⁶⁴⁾では「考ふる処あり初等教育界にあつて多年の蘊蓄（うんちく）を實際に活用すべく大正二年東京市下谷東盛小学校長に転じ」と書かれている。

牧口は自らの意思で文部省の仕事に見切りをつけた。牧口がめざしたであろう新しい地理教科書の編輯はついにかなわなかった。しかし、この雌伏の時期に国定地理教科書の編纂事業の現場に立ち、その限界を身をもって実感し、同時に柳田との知己を得るなかで農山村調査を行った研究活動を経て小学校の教育現場で、地理科だけでなく新しい理想の教育原理の創設をめざしたことはこの後の彼の軌跡をたどれば見えてくる。

注

- 1) 1909年1月の牧口自筆の履歴書による。
- 2) 「創価教育の源流」編纂委員会『評伝 牧口常三郎 創価教育の源流 第1部』第三文明社、2017年6月、183～185頁。
- 3) 柳田国男『故郷七十年』朝日選書7、朝日新聞社、1974年、308頁。牧口常三郎『創価教育学体系』第1巻の柳田国男の序文。
- 4) 牧口常三郎『創価教育学体系』第1巻の柳田国男の序文。
- 5) 畠中惣治郎『帝都紳士淑女列伝』帝都彰行社、1929年7月1日、85頁。

- 6) 馬場孤蝶は普通選挙運動の団体「普通選挙同盟会」の会員でもあり（松尾尊兌『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店、1989年7月、103頁。）、牧口の友人で社会主義者・山根吾一（牧口が北海道師範学校在職時に同地で各小学校校長や北海道毎日新聞教育取材担当として牧口と長い交流があった。『平民新聞』を幸徳秋水、堺利彦らと立ち上げたとき庶務担当として支えた社会主義者。）の同志であった。同盟会の拠点が山根の自宅にあった。牧口は一時期、普通選挙運動に加わっており、おそらく、友人の山根を通じて両者は交流していた普選運動仲間だったと考えられる。『創価教育学体系』第3巻第1章に社会主義者との交流のなかで普選運動に参加したことを明かす。当時「普通選挙同盟会」は山根吾一が住む神田・三崎町に事務所を置いていた。牧口も近隣にいた。
- 7) 柳田国男『定本 柳田国男集』別巻第三、筑摩書房、1971年3月、年譜628頁。
- 8) 柳田国男『定本 柳田国男集』別巻第三、筑摩書房、1971年3月、187頁。
- 9) 郷土教育の先駆者。早稲田中学の地理教師の時に牧口と知り合い牧口が編纂した高等女学講義の地理を担当。柳田国男とともに新渡戸稲造を囲む「郷土会」をつくり推進した。柳田は小田内通敏を自分に紹介したのが牧口だったかもしれないと書いているのでその可能性もある（柳田国男『故郷七十年』朝日選書7、朝日新聞社、1974年、308頁。）。牧口が主幹として率いた大日本高等女学会の講義録『高等女学講義』講師陣の一人が小田内通敏だった。（大日本高等女学会機関誌『大家庭』第3巻第1号、1907年12月、3頁。）
- 10) 前出『定本 柳田国男集』別巻第三、629頁。
- 11) 岡谷公二『貴族院書記官長 柳田国男』筑摩書房、1985年、4頁。
- 12) 牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究』以文館、1912年11月23日刊。
- 13) 「序言」には「私が此方面に思ひを凝したのは十数年来の事で」とある。おそらく『人生地理学』発刊（1903年）のころから構想を練り始め、準備していたと思われる。
- 14) 牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究 改訂増補』創価教育学会、1933年4月、427頁。
- 15) 『教育界』第9巻第7号、金港堂、1910年5月3日刊、117頁。
- 16) 畠中惣治郎『帝都紳士淑女列伝』帝都彰行社、1929年、85頁。
- 17) 『日本帝国文部省第38年報』上巻、文部大臣官房文書課、1912年7月26日、48～49頁。
- 18) 牧口が囑託になった1910年（明治43年）、文部省全体で囑託は142人いた。
- 19) 前出『評伝 牧口常三郎』185頁。
- 20) 前掲『教育界』第9巻第7号、117頁。
- 21) 文部省『学制百年史 資料編』文部省局課変遷表、1972年10月、321頁。
- 22) 『東京府市自治大鑑』後巻、東京府市政通信社、1926年12月、465頁。
- 23) 牧口常三郎「日本地理教授上の主眼点」『内外教育評論』内外教育評論社、1910

年6月1日発行、51頁～53頁。

- 24) 前出 畠中惣治郎『帝都紳士淑女列伝』帝都彰行社、1929年、85頁。
- 25) 1902年から翌年にかけて北海道を除く全国の小中学校、師範学校の教科書採用めぐり、金港堂をはじめとする教科書出版会社と、その採用を決める文部省官吏、県知事、高等師範学校教授、府県視学、師範学校校長などの間で起きた全国規模の贈収賄事件。逮捕者が200人を超える大疑獄事件。
- 26) 文部省『学制百年史』1972年10月、306頁。
- 27) 明治43年度（1910年）の省務報告として「小学校教科用図書に就きては数年来の経験に鑑みて修正を加え既に本年度より大部分改訂図書を使用せしむるに至れり」とある。（『日本帝国文部省第38年報』上巻、1頁。）
- 28) 教育学研究会編『地理教授要領 改訂国定教科書 尋常科五年』同文館、1910年6月15日刊。
- 29) 教育學術研究会編纂『尋常科 改訂国定教科書 新教授細目』同文館、1910年4月25日刊。
- 30) 文部編修 川上瀧男『算術講習筆記』私立岡山県教育会、1911年2月20日刊でその内容がまとめられている。同じような講習が各地で行われていた。
- 31) 「伝記 牧口先生の御一生」『大白蓮華』第12号、14頁。
- 32) 北海道教育会『北海道教育雑誌』第63号、1898年3月3日、37～39頁。
- 33) 同前 北海道教育会『北海道教育雑誌』第72号、1898年12月、46頁。
- 34) 北海道教育会『北海道教育雑誌』第73号、1899年1月、41～43頁。
- 35) 北海道教育会『北海道教育雑誌』第94号、1900年11月、特別広告。山崎長吉『人間教育を結ぶ～北海道が育んだ牧口常三郎』（北海タイムス社刊）。
- 36) 『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社刊、1983年、406頁。
- 37) 1911年（明治44年）10月に文部省が認定した全国の公立図書館に配置する優良図書1000冊の1冊として牧口の『人生地理学』が選ばれ（文部省編『図書館書籍標準目録』国定教科書共同販売書発行、1911年（明治44年））、また1914年（大正3年）7月に文部省が認定した『文部省認定済通俗図書目録』に同じく『人生地理学』が選ばれているが（『文部省認定済通俗図書目録』文部省普通学務局第3課、1914年7月。）、あるいはこうした優良図書調査の仕事もしていたのではないだろうか。
- 38) 『東京府市自治大鑑』後巻、東京府市政通信社、1926年12月、465頁。
- 39) 『大正二年 職員録 甲』印刷局、1913年。
- 40) 『職員録 甲 明治四十三年』印刷局、1911年、573～574頁。
- 41) 前出『職員録 甲 明治四十四年』印刷局、1912年、578頁。
- 42) 喜田貞吉『還暦記念 六十年の回顧』私家版、1933年（筑摩書房 明治文学全集 78 松島栄一編『明治史論集』二 所収、1976年8月、384頁）。
- 43) 茗溪会機関誌『教育』第333号、茗溪会、1910年11月15日、30頁。

- 44) 牧口自筆の履歴書、『北海道教育週報』1896年7月4日付け、2面。
- 45) ちなみに牧口と同じ文部属の役人がこの講習を受けていないか当時の講習受講者名簿を調べたが牧口以外に一人もいなかった。(茗溪会機関誌『教育』第333号、茗溪会、1910年11月15日、30頁。)
- 46) 前出 喜田貞吉『還暦記念 六十年の回顧』。
- 47) 『国定教科書意見報告語彙纂 第1輯』文部省図書局、1912年(大正元年)8月、以後、第5輯まで確認できるが第5輯は大正8年刊行、文部大臣官房図書課刊。
- 48) 『内外教育評論』内外教育評論社、第4巻第6号、51～53頁。
- 49) 同上『内外教育評論』内外教育評論社、第4巻第6号、7～11頁。
- 50) 柳田国男『定本 柳田国男集』別巻第五、筑摩書房、1971年3月、年譜629頁。
- 51) 柳田国男『郷土会記録』大岡山書店、1925年、1頁。
- 52) 牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂増補10版、創価教育学会刊、1933年4月、425頁。
- 53) 柳田国男『故郷七十年』朝日選書7、朝日新聞社、1974年、308頁。柳田国男『定本 柳田国男集』別巻第三、筑摩書房、1971年3月、188頁。柳田国男『定本 柳田国男集』別巻第五、筑摩書房、1971年5月、年譜629頁。1911年5月12日から現地調査しているので、10日に東京を発っている。
- 54) 前津江村『大正2年4月以降 前津江村事務報告綴』「雑件として客年8月20日、牧口文部省属、町村巡視のため来村」とある。
- 55) 北小国村役場『明治44年度 日誌』「8月24日 牧口文部属来村につき宇都宮書記随行」「8月25日 牧口文部属帰途につく」、『南小国村 日誌』「8月25日 牧口文部属 農村経済状態及教育状況視察として来場あり橋本学務委員随行 梅ノ木堂方面より立岩及満願寺方面実地視察せらる」とある。
- 56) 牧口常三郎『創価教育学体系』第1巻の柳田国男の序文。
- 57) 鶴見太郎『ある邂逅 柳田国男と牧口常三郎』潮出版社、2002年11月、93頁。
- 58) 絵葉書、消印 明治44年8月29日、阿蘇神社記念スタンプが押されている。
- 59) 『復刻版 明治大正時刻表(汽車汽船 旅行案内 明治四十年三月)』新人物往来社。
- 60) 『定本 柳田国男集』別巻第五、筑摩書房、1971年、630頁。
- 61) 牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究』創価教育学会、1933年、改訂第10版奥付。
- 62) 文部省『学制百年史 資料編』1972年、324頁。
- 63) 畠中惣治郎『帝都紳士淑女列伝』帝都彰行社、1929年7月、84頁。
- 64) 南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」(『地理学研究』第2巻第8号、地理学研究会発行)1925年8月、30頁。

